

沼津兵学校に学んだ田邊朔郎

近代土木技術の基礎を築く「代戯館まつりで講演会」



各種大型工事に足跡

近代土木技術の基礎を築いた沼津兵学校出身の田邊朔郎をテーマとした第3回代戯館まつり(同実行委主催)の記念講演会が大手町の沼津信用金庫四階ホールで開かれ、京都百年の計である琵琶湖疏水事業(一八八五―一八九〇年)を追った「京都インクライン物語」の著者、田村喜子さんが講師を務めた。

講演会に先立ち斎藤衛市長があいさつし、「目先のことではなく将来のことを考えて取り組まなければならないということは、今の沼津にも言えることだと思う」として、田邊が手掛け百二十年経た今も人々に恩恵を与え続けている琵琶湖疏水などの事業を評価した。

続いてあいさつした諏訪部恭一・同信金理事長は、「事業を起こして百二十年たっても素晴らしい成果を与えている事業というのは、なかなかない。(沼津市の)鉄道高架事業の(工事に要する)二十年が長いという人がいるが、目先のことだけでなく子孫のために行われるもの」などと話した。

この後、田村さんの講演に移り、田村さんは「百年前の人が百年後の未来にどんな展望を持ち、どんなことをしたのかと、百年後の我々が考えることは意義がある」などとして話を始めた。

当時の国家予算七千万円と比較しても莫大な、百二十五万円という金額を投じた琵琶湖疏水事業の中心約役割を担い、以後も北海道鉄道敷設、関門海峡トンネル建設で、やはり中心となった田邊朔郎。

田村さんは、「田邊は幸福な人生を送ったように思われるが、決してそうではなかった。生後一年たたずして父親が他界し、顔を覚えることもできなかった」と述べた。

田邊には父親より十歳ほど若い叔父の太一がいたが、沼津兵学校の一等教授として沼津に移り住んでいた太一のもとに、六歳ごろに預けられた。三年間、この地にいた後、外交官となった叔父とともに東京に移った。

太一は最初は断っていたものの、外交官に任官。岩倉具視らとともに外国を見て回り、日本を興すには工業の発展しかないと考えるようになった。

田邊は叔父の勧めもあって、十三歳で工学系の学校、工学寮(後に工部大学校と改名)小学校に入学することになる。太一には「武士が生き残るためには学問に頼るしかない」とい

う考えがあった。

二年後に六年制の工学寮(工部大学校=現東大)に進学。教師が全て英国人のため授業も英語で受けた。卒業論文も英語で、テーマは日本の国を近代化するためのプロジェクトを探して調査、研究し、それを論文化するというものだった。

田邊には、京都、大阪地区を調査区域として指定され、当時開通していた新橋・横浜間を汽車に乗ったほかは徒歩。十日間をかけて京都に着いた。ちょうどその頃、京都では、首都が東京に移って沈滞したまちを工業化によって再興しようという空気がみなぎっており、琵琶湖疏水にも目が向けられていた。疏水は水運、灌漑、水車による動力の確保を目指したものだ。時の京都府知事、北垣国道は、琵琶湖疎水を実現させようと意欲を持って取り組み出していた。

この話を聞いた田邊も自分の卒業論文のテーマとして疏水計画を立てることにした。この計画のための調査で京都にいた時、田邊は右手中指にけがをし、その日はそれほどでもなかったが、東京に戻ってから悪化。右手を吊った状態で卒業論文に取り組まなければならなくなった。

工部大学校は学士の授与に関し、卒業生の中でも成績優秀なものに限っており、優れた論文を書かなければいけないという思いに迫られる一方、母子家庭で育ち貧しかった田邊にとって留年は許されないものだった。なんとか左手で論文を書き終えたが、製図の際には定規に重りを載せて線を引き、しかも烏口につけた墨が乾かない間に行わなければならないという苦しい経験は、彼にとって有益となったようだ。

右手の負傷という困難に負けず、現在の価値にして一兆円にもなる国家的プロジェクトの計画を論文化させた田邊に石垣知事は不屈の精神を感じ、話をした際の印象も含めて琵琶湖疏水事業を二十三歳の若者に託すことにした。

この後、事業が動き出す。計画の初期は水車だった動力も、田邊が見た土木雑誌の水力発電の記事で方針を変更。田邊は、「これからの動力は電気だ」と気付いた。水力発電は仙台が日本で最初だったが、電力を事業用に使おうとしたのは琵琶湖疏水事業が第一号。水車では歯車など動力を伝える仕組みが複雑なため動力源となる工場が近くに求められるのに対して、電気は電線を張れば遠くで発生させたものを伝えることができた。

田村さんは、「事業用水力発電は当時、世界でも二つしか事例がなく先駆的なものだったが、これを田邊はやってのけた」と評価。また、「技術者として、いい意味の野心があり、それを感じた知事は、息子のような若者に事業の成否を託したのだろう。この二人の関係がプロジェクトを成功させたと言ってもいい」と話した。

この後、田邊は北海道で総距離一、六〇〇*の鉄道敷設に携わることになるが、北海道では、まちとまちの間が離れていることから近代化したまちづくりに鉄道は不可欠。交通の結節点である港を整備する必要もあった。

北海道は東北六県と新潟県を合わせたほどの広さであることから、当時の政府は、「北海道には東北七県のような地域をつくれ」と指示したが、田邊はそうではなかった。

田村さんは、「(田邊は)北海道は最新の技術を使って、アメリカをモデルにした国土づくりをしなければいけないと言っていた。人口四百五十万人の都市を作らなければいけないとも。こういうことを百年前に考えていた人だ」と、先見性とスケールの大きさを示唆。

「革命を起こすというのは法律を変えることではなく、技術者によってもたらされるものだ」という感銘を受けた言葉をもとに、「田邊は実生活でそれをやってきた」と話した。また、田邊がかかわった関門海峡の工事では日本で初めてシールド工法が採用され、これ

を提案したのが田邊だが、この工法は今では地下鉄工事でなくてはならないものになっていることから、革新的な技術が、その後の事業の成果を生み出したとも言える。

最後に沼津に言及した田村さんは、「昔、沼地だった場所を江戸時代に土で埋めて住んだり、畑作ができるようにしたということを聞いている」として当時の人達の苦勞を思いながら、現代でも田邊の示した教訓が生きているとし、革新的技術による地域開発の可能性を求めた。（沼朝4月4日号）